

「英語コミュニケーションⅠ」のテンプレートを考える

—BLUE MARBLE English Communication I を例に—

坂 将人

1. はじめに

現在、社会人になって15年目、英語教諭になって15年目、本校に勤めて15年目である。新任の頃が昨日のこのように思い出されるが、そろそろいい歳になっていることを自覚すべきかもしれない。本冊子への投稿依頼も何度かいただいたことがあり、今回はお邪魔させていただき決意をした。

2. ここ約30年間の動き

ここ約30年間の外国語の学習指導要領の変遷を調べてみた。自分の高校時代は「英語Ⅰ／Ⅱ」やら、「オーラル・コミュニケーションⅠ／Ⅱ」やら、「リーディング」やら「ライティング」やらといった名称で授業が行われていた。高校には皆勤で通ったが、英語の授業は一言でいえばすべて「訳読式(薬毒と変換された)」で、授業中はたまに当たる程度で、ペアワークやグループワークなどは1度も行われた記憶がない。定期試験も入試も、ある程度の詰め込みができていれば、それなりに取れる時代であった。大学入学後は、コミュニケーション系の専攻であったため、多少は発信する機会が増えたが、英語を話さないと生きていけない環境ではなかった。

3. 新任時代の授業

高校教諭になり、1年生の担当から私の教師生活が始まった。当時は「英語Ⅰ」でいわゆるリーディングを、「英語基礎Ⅰ(学校設定科目)」でいわゆるグラマーを行っていた。当時から自分の受けた教育をそのまま行うことが正解であるとは思っていなかったが、「英語Ⅰ・英語基礎Ⅰ」ともに、解説中心の授業展開をしていた。同僚の先輩の指導を仰ぎつつ、ある程度自由に授業をさせていただいた。当時から生徒の笑顔を引き出すのが好きで、授業の冒頭で「今日のヒトネタ」という時間を毎時間設け、本やインターネットで無理やり見つけた英語のジョーク

や雑学を披露し、時にスベりつつも、何とか生徒を惹きつけていた。授業中も生徒とのやり取りで笑いが起きたり、時に挟む雑談で盛り上がりやすることがよくあった。授業を観に来てくださった先輩に、「教科書のコンテンツ自体でもっと生徒を惹きつけられるとよい」というコメントをいただいたことがあり、今でもこの言葉は時折フラッシュバックする。

4. 15年間のモヤモヤ

1年目の副担任以降、2年目からは14年連続正担任、分掌のまとめ役や探究活動、教科主任・学年主任、部活動正顧問等も兼務してきた。多くの学校の先生方が同様の生活をされていると思うが、常に何かに追われて生きているのが現実である。授業をないがしろにしたことはないが、余裕をもって教室に行ったことはあまりない。授業力を上げるために、本をたくさん買い込んだり、全国各地のさまざまなセミナーに出向いたりしてきた。そこで出会った先生方から学んだアプローチを授業で実践させていただくことは多くあった。

校内の問題としては、学校の規模が大きく、教員も多いため、意思統一をはかるのが難しく、授業の持ちコマの種類が多すぎる(年間で6種類の授業を受け持ったことが何度かあった)などが挙げられる。同じ学年でも、コースによって教科書や副教材、単位数が異なり、何とか授業になるように準備して教室へ行くことが手一杯であった。コースによって定期試験の内容を変えることも多く、試験週間には複数の試験作成を抱えることが多くあった。

5. 仕組みづくりの覚悟

私が教科主任になった際、業務負担の軽減のために、学年ごとの教科書を原則統一する方針を固めた。反対意見もあったが、コースの差は副教材でつけることとし、強引に合意を得た。

何とか教科書が統一となり、自分が受け持った学年を中心に、指導アプローチや定期試験の統合に努めてきた。グループ LINE や Slack を用い、プリントやスライドを共有しつつ、なるべく意思統一をはかりながら指導をしてきた。何かと個人プレーに走りがちな教科指導を、ここ数年、少しずつではあるが、チームプレーでできるようになってきた。

今年度(2022年度)の高校1年生より新学習指導要領へと移行し、観点別評価の実施が求められた。学校や教科の方針が漠然と決まったが、現実的には担当者の裁量に委ねられる部分が多かった。そのため、担任配当が発表された頃から、次年度1年生担当者で何度も集まり、授業方針を定めていった。今回はその中の「英語コミュニケーションⅠ」の現状と今後の課題を報告させていただく。使用する教科書は、前年度3年生の教員が採用を決めた *BLUE MARBLE English Communication Ⅰ* である。

6. 新評価基準

これまでの本校の方針では原則、80%以上を定期試験で、20%までを提出物や小テストで平常点をつけることが可能であった。今回の観点別評価の導入により、50%まで平常点をつけることが可能となった。話し合いの末、思い切って1年生は原則、50%を定期試験、残り50%を平常点で評価することにした。コースによって若干の差異はあるが、原則以下の形で評価をすることとした。

すべての成績は、共有ファイルとして、同時入力、一元化を可能にした。

■定期試験	[50%]
<input type="checkbox"/> BLUE MARBLE	[50点]
<input type="checkbox"/> 実力問題	[20点]
<input type="checkbox"/> Listening	[15点]
<input type="checkbox"/> 単語帳	[15点]
※上記100点満点の試験を50%換算する。	
■Performance	[30%]
<input type="checkbox"/> 単元テスト	[20%]
<input type="checkbox"/> Output	[10%]
■提出物	[20%]
<input type="checkbox"/> Power Up Sheet	

7. 授業テンプレート

話し合いを重ね、授業のおおまかな流れ(3単位

モデル)を以下の形に定めた。各コマの概要は次章以降で説明する。

【1コマ目】

- (1) Power Up Sheet 回収
- (2) 単語確認
- (3) 熟語確認
- (4) 本文解説
- (5) 音読
- (6) Power Up Sheet 配布

【2コマ目】

- (1) Power Up Sheet 回収
- (2) 復習(単語・熟語・本文)
- (3) Output 活動
- (4) 単語帳音読
- (5) Power Up Sheet 配布

【3コマ目】

- (1) 単語テスト
- (2) 復習(単語・熟語・本文)
- (3) Listening
- (4) Power Up Sheet 配布

【その他】

- (1) 週に2回、朝の ST (Short Time) で「単元テスト」を実施(コミⅠ, 論表Ⅰ:1回ずつ)
- (2) 論表Ⅰで「i+1」ノートを実施

8. 1コマ目のテンプレート

原則週に2回は予習用課題が出るようになっており、それを Power Up Sheet と名づけた。1コマ目の冒頭で回収する Power Up Sheet は、教科書のパートごとの本文の予習と要約である。本文の予習は「①自分の目で読んで、よく意味がわからない文・部分に下線を引く」→「②解説動画(数研出版作成)を観て、SVOCM(構造)、意味、ポイント等を記入する」ものである。要約は指定された語数以内で英語で記入する。これらがきちんとできていた場合は平常点を与える。集めるタイミングより遅れて提出することは不可としている(欠席の場合を除く)。

冒頭の Power Up Sheet 回収後、1コマ目の授業で使用するハンドアウト A4二枚(いずれも両面)を配布し、「単語・熟語の確認」、「本文解説・音読」

の流れで授業を行う。

ハンドアウトの1枚目には、表面に単語一覧、裏面に熟語一覧を印刷している。単語・熟語は教師用データに収録されているものを使用しているが、単語のフォントやサイズを変えたり、アクセントを1つずつ入力したりして、一部変更を加えている。

ハンドアウトの2枚目には、表面に本文(日英スラッシュ)、裏面に1文ごとの和訳(英文も含む)を印刷している。こちらも教師用データに収録されているものを使用しているが、表面の本文は私の場合、Excel から Word に移している。そのうえで、文法的に大事なところに「線」、指示語に「線」、イディオムに「線」を入れたり、印刷後、手書きで構造を気にしてほしい英文にSVOCMを書いたり、品詞を気にしてほしい英文に名詞「[]」、形容詞「< >」、副詞「()」を記入したりしている。裏面の和訳は、教師用データの英文と和訳を1文ずつコピー&ペーストし、センテンス単位で英文を復習できるものに編集している。

ハンドアウトは担当者間で共有しているが、授業展開に関しては、ある程度、担当者の裁量に委ねられている。私の場合、単語確認の際、派生語・反意語、発音のポイントや接頭辞・接尾辞等を説明している。また、熟語は本文の中でマーキングをさせ、元データの一覧に入っていないなくても、覚えてほしいものは別にピックアップしている。本文の解説は、生徒は事前に解説動画を観ているものの、スライドを独自に作成し、1文ずつざっと解説している。その後、残された時間でペアや個人で音読をさせている。これらの行程を終え、ようやく次の Power Up Sheet を配布して授業は終わりとなる。

9. 2コマ目のテンプレート

2コマ目の冒頭で回収する Power Up Sheet は両面印刷となっており、表面に「LOGIC FLOW」「True or False (Listening Quiz をリーディング問題として出題)」「Answer the questions (TASK 1)」を、裏面にワークブックの「Words & Phrases」「Expressions & Grammar」「Comprehension」を、いずれも教師用データからコピー&ペーストしている。また、裏面には「本パートで得たこと(必須)」「質問・コメント(あれば)」も記入させている。全体の取り組みが浅かったり、パートで得たことが

記入されていなかったりした場合は減点となる。

上記の Power Up Sheet 回収後、1コマ目の復習を行う。担当者の裁量ではあるものの、原則「単語・熟語・本文」の復習や音読を行うことが多い。その後、2コマ目メインの Output 活動に入る。

Output 活動で使用するハンドアウトは A4 一枚(両面)で、表面は本文の「Summary」, 「Picture Description (TASK 2)」(下図参照)、裏面は「Your Opinion」のワークシートとなっている。

Lesson 3 The Fascinating World of a Professional Storyteller Part 2 【Output】

(1) Summarize the text to your partner.

■Japanese

①南喬は講談にとっても魅了されています。
 ②彼女は非常に非常に創造的な世界です。
 ③彼女は講談の楽しい手の動きや表情に見とれています。
 ④彼女は、講談の話や日本の歴史上のおもしろい人物が大好きです。

■English

① _____
 ② _____
 ③ _____
 ④ _____

(2) Describe the pictures below to your partner.



①
[gesture, blooming]



②
[confidence, evilness]



③
[Sakamoto Ryoma]

The *kodan-shi* used

① _____
 ② *Kodan-shi* can show _____
 ③ *Nanshun* enjoys _____

1コマ目と同様に、授業展開は原則、担当者の裁量に委ねられている。私の場合、復習を行ったうえで、本文の Summary をペアで日本語で言わせている。それを全体で確認し、Summary(日本語)の解答例をスライドで映したあと、ハンドアウトを配布する。受け取った生徒は、ハンドアウトに書かれた日本語の Summary を英訳する。うまく英語が出てこない生徒は、1コマ目に配布したハンドアウトを参照することを認めている。

Summary の英訳解答例を確認後、Picture Description に入る。現状は、教師用データに収録されている教科書の TASK 2 をそのまま行っている。私の場合、Summary と同様に、まずは絵に描かれている状況をペアで日本語で説明させている。それを全体で確認し、日本語の解答例をスライドで映す。

生徒はそれを適宜見ながら、英訳していく。Summaryと同様、スライドに映っている日本語をどれだけ見るかや、1コマ目のハンドアウトを参照するかどうかは、生徒個人の判断に任せている。

Picture Descriptionの英語解答例を確認後、Your Opinionに入る。現状は、教師用データに収録されている教科書のYour Opinionをそのまま行っている。私の場合、まずはTopicの意味をペアで確認させる。その後、日本語かキーワードで論理展開を考えさせる。それを場合によってはペアで共有させたいので、意見を英訳させる。辞書使用や1コマ目のハンドアウト等の参照は、これまでと同様、任意としている。完成後、ペアでスピーチを行わせ(聴く側はメモ・質疑)、代表者数名をクラスで発表させている。そのうえで、解答例をスライドで映している。

以上のすべてのタスクが完了後、ハンドアウトを回収する。最大の評価ポイントはYour Opinionの内容にしているが、やるべきことをやれている生徒にはPerformanceの平常点を与えている。

その後、残された時間に応じて、単語学習を行っている。入学時より配布している単語帳で、リピートをさせたり、クイズを行ったりしている。原則、週に50語を習得することを目標とさせている。

最後に、次のパートのPower Up Sheetを配布し、授業は終わりとなる。

10. 3コマ目+その他のテンプレート

3コマ目は2コマ目までにやりこなせなかったことや、祝日や行事で授業がなくなった場合の「調整コマ」にしている。以下に、2コマ目までに問題なく授業が実施できた際の授業テンプレートを示す。

冒頭に単語テストを実施している。クラスごとに問題を変え実施しているが、現状平常点には入れていない。点数入力には毎回行っており、クラスごとや個人ごとの習熟度の推移を確認している。その後、時間的に余裕がある場合、教科書の復習(単語・熟語・本文)を再度行っている。

3コマ目は主にListeningを行っており、入学時に配布した副教材を1レッスンずつ進めている。ざっくり述べると、共通テストを意識したうえで、設問確認→設問解答→Dictation→音読等を丁寧に行っている。さらに時間的余裕がある場合は、別メニューを行うことがある。

その他に行っていることとして、週に2回、朝のSTで「単元テスト」を実施している(コミI、論表I:1回ずつ)。コミIの場合、原則教科書のパートごとに英文と和訳の穴埋めテストを実施している。

また、論表Iでは「i+1ノート」という取り組みを行っている。Krashenのインプット仮説(Input hypothesis)を参考にし、自分に合った教材を各々学習してくる課題を出している。この内容に関しては、また機会があれば紹介したい。

11. 今後の課題

以上、ざっくりと私のこれまでの教育歴と現場の動き、直近の授業アプローチを開示させていただいた。「いまだにこんなことをやっているのか」と思われた方がいらっしゃるかもしれない。私としても、これが完成形だとは微塵も考えていない。本原稿を書いている最中にも、何度か話し合いを行い、アプローチのマイナーチェンジを準備している。

「教師と生徒の適切な負荷」を具現化し、多忙な日常の中、指導する側の英語力や授業力を上げる時間も捻出したい。自分の中での最低限の授業にする準備だけでも大きな労力がある中、よりよい授業にしていけるためには多くの課題が残されている。

教科書会社の付属データも年々充実してきているが、どう調理すればよいかは常に頭をひねらせている。本年度の1年生よりタブレットが全員に配布され、教育のICT化も急務である。

進捗についても再考の余地がある。確認をとったところ、BLUE MARBLE English Communication Iの大まかな収録語数は約7,000語である。共通テスト(英語リーディング)1回で読み切らなければならない情報を1年間かけて精読しているようなもので、世の中に流れる情報の加速化と天秤にかけても、悩ましい。

教科書ほどきちんと練られて作られたものはそうそうないが、教科書だけでは不十分という言い方もできるかもしれない。多くのことをAIができる時代となった昨今、私たちの授業も、理想的なオペレーションシステムを構築し、あとはソフトを入れるだけの状態とし、安定した日々を送っていきたいものである。